

# アンガウル島採集の貝斧\*

国 分 直 一

Shell Adzes from Angaul Island.

By

Naoichi KOKUBU

Angaur Island is a small island lying to the west-south of Palau Island, Micronesia.

It is said that two shell adzes from Angaur Island were brought back by Mr. Sensoku Hirayuwa (平岩千束) shortly before the beginning of the Second World War and were presented to the Iida Takamatsu High School of Nagano Prefecture.

One (see Fig. 1) resembles an adze of the Yayoi type.

The other adze (see Fig. 2) resembles the pestle type stone adze, as is named by Mr. Ichiro Yahata (八幡一郎).

I am indebted to Mr. S. Hirayuwa. He kindly afforded me with his notes on the said adzes.

## (一)

長野県飯田高松高等学校の地理研究室には南洋資料があると考古学協会員大沢和夫氏に御注意を受けたので調べてみると同県阿南高等学校におられる平岩千束氏によつてアンガウル島採集の貝斧が寄贈されていることが判明した。

アンガウル島とはパラオ本島のやゝ西南の小島である。平岩氏がその島で土人が採集して所蔵しているのをもらい受けて、戦争前にもち帰えられたものであるという。

僅か2例の標品ではあるが、失われてしまつた島の標品例として注意しておきたい。

## (二)

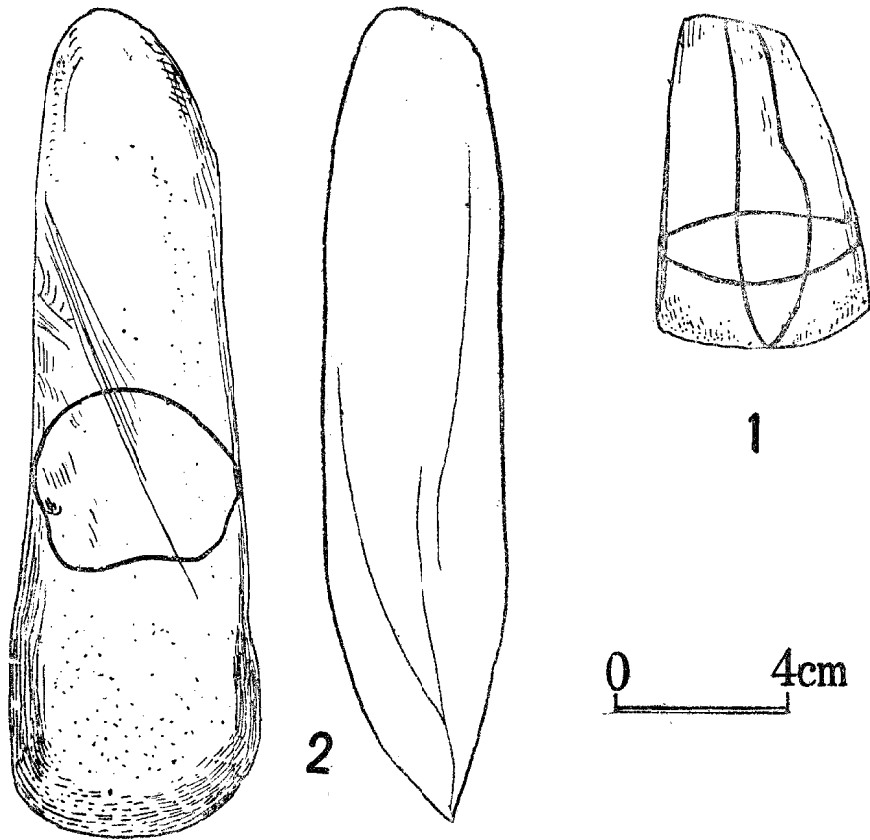
第1図の標品は縦長7.7cm 斧口の幅4.8cm, 厚さ器軸の最厚部に於いて1.9cm。

第2図の標品は縦長18.8cm 斧口の幅6.1cm, 厚さ器軸の最厚部に於いて4.2cm。

何れも器面に若干の風化面をとゞめている。第1図標品は扁平片刃石斧とよばれているものと類似した形態といつてよいと思うが、刃部がやゝ開き、刃縁はやゝ弧状を示している。断面は無角ではないが明瞭な角形を示していない。刃部の形態から見て adze 形式の利器であることは明瞭である。

断面方形を示す扁平片刃石斧は彌生式文化に伴う石器として著しいが、頭部が狭く断面明瞭な方形を示さず扁平楕円に近い形式を示すものは南島にも見出される。台湾に於いては断面明瞭な方形を示すものが盛行している。

\* 水産講習所研究業績 第166号



Adzes from Angaur Island.

貝を材料とした第1図標品類似の形式のものは南太平洋諸島に広く見られるが、隆起珊瑚礁が発達しているので、珊瑚礁を用いたものもある。ポリネシア協会の雑誌には多くの資料を見出すことが出来る。豊富な写真をかゝげた一例としては *The Journal of the Polynesian Society*, 第40巻第4号所載の *Field Notes on the Culture of Vaitupu Ellice Islands*. をあげておきたい。D. G. Kenedy氏によつて報告されたものである。

第2図標品は八幡一郎氏の所謂乳棒状石斧に当るものであるが、片面はほぼ貝の自然面の傾斜を利用し、片面はやゝ顯著に磨研して刃部を造形している。

八幡氏は九州では乳棒状斧の発現が意外に早く、これが漸次東して中部日本へは縄紋中期初頭に到達したと考えしめるのであるといわれている。(日本の石器 98頁—99頁)

氏は更にこの形式が九州自体に生れたものであろうかとして、日本周囲に於ける乳棒状石斧の分布について概観し、次の如く述べている。(前提書 99頁)。

「日本の周囲に於ける乳棒状石斧の分布を見るに、北支、南滿、朝鮮半島には殆んど知られておらぬ。然るに東印度諸島には之を見ること珍しくない。台湾に之があるか否かは明かでないが、琉球には相当存する。更にわが南洋群島中マリヤナ諸島には多少型式は異なるが存し、更に小笠原、北硫黄島からも発見されている。勿論内地においてさへ空白の部分余り多く残っているのであるから、その研究を捨てゝまで、日本以外のものと比較することは行過ぎの感があるが、事實は事實として今後の好研究題目たり得る。」と。

乳棒状石斧は台湾では扁平片刃形式のもの如く明瞭ではない。やや断面楕円を示す円筒斧

の発見例はあげること出来る。然して台湾本島北部に於いてはこの形式のものにかわつてクルムデクセル型の厚手の有段石器が盛行している。

乳棒状石斧のポリネシアに於ける例としては前掲の D. G. Kenedy 氏の報告中にチピカルな標品例が見出される。然し南太平洋諸島に於いては貝製品が盛行し、又隆起珊瑚礁を用いるもののあるのは石材を得ることの困難な事情によるわけであろう。

日本に於いてもこの形式のものが琉球諸島から南九州に及び\* 北方でも奥羽の陸奥、羽後、北海道の後志に及んで見出されることは太平洋水域に於ける一連の関係ある技術に結びつくものでないかを思わしめるものがある。

その用途であるが、アンガウル島の乳棒状石斧はやゝ片刃形式に近いので割斧であろうと考えるものである。重量と刃縁の鋭利さから見て、船材の削割にも耐えるものと考えられる。台湾紅頭嶼のヤミ族は断面屋根形を示す厚手の片刃石斧で船材を削つたと伝えている。台湾北部の厚手の有段石斧の場合も木材の削割に用いられたものかも知れない。

昭和29年春波照間島の調査によつて見出された断面割竹形を示す厚手の重量ある片刃石斧の如きも同様の用途を示すものと考えられる。九州から西鮮にかけての背面に扶入加工を有する厚手の片刃石斧もまた同様の用途をもつものでないかと思つている。

然しながら八幡氏の所謂乳棒状石斧の中には刃部の構造から見て、片刃形式に近いものと両刃の蛤刃形式のものがあるようである。後者は割断用のものであるうか。

太平洋水域に拡がり分布するこれら削割或は割断用かと思はれる石器の分布は木材加工の技術の証跡と見てよいものでないかと思はれるものであるが、木材加工の中でも殊に一連の造船技術に関連する証跡と見てよいものでなからうかとも考へている。\*

前記の D. G. Kenedy 氏報告中には第1図標品よりやゝ長目かと思はれる貝斧に柄を附して刃縁を上に向けて柄部を固定し椰子の実の内部を削りつつている図を示している。

鹿野忠雄博士は台湾中部のツォウ族が扁平片刃石器を以つて獣皮の生皮かきとり具として使用したことを報告されている。

第1図標品がアンガウル島に於いて何に使用されたものかは不明であるが削割用の利器だつたことは推定出来ると思ふ。

## 註

\* 金関丈夫博士は昨秋民俗学研究所に於いて、波照間島調査についての報告をされた際この問題によつてふれた。